

令和4年度
白根北児童館年次報告書

I 令和4年度の運営総括及び来期の課題

1. 総括

今年度も引き続き新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けました。今年は休館にはならなかったものの、近隣の学校等の流行が来館者数に影響しました。引き続き感染対策を実施しながら運営しました。

①来館時の決まり

来館時にはマスクの着用を徹底しました。小学生以上はマスク着用を義務化し、乳幼児は保護者の判断に任せました。最近では新しい生活様式のもと、どこに行くにもマスクの着用は習慣付いていますが、小学生でもマスクをせずに公園で遊んでいてそのままマスクを持っていなかった等、事情によりマスクを忘れた子どもには白根北児童館で用意したマスクを提供しました。特に小学生はマスクが下がり、鼻が出ている、口が見えている、マスクを銜えている姿が見られ、その都度マスクを鼻までするよう声掛けしました。3月24日の通達により、【マスクは本人の判断に任せる】対応をしましたが親にどのように言われているか確認すると、まだマスクはしたままでと言われている児童が多く、外す児童はいませんでした。

②受付方法の変更

来館したらまず予防効果が高い「石鹸での手洗い」を徹底しました。今までは受付で来館者本人が個人カードを自分で探し入館及び退館ケースに入れ、職員が来館者の把握をしていました。しかし、カードに触れる事でのウイルスの接触感染を回避する事と、日ごとの来館者の情報把握を目的として南区役所健康福祉課から頂いた入館者表のデータをもとに来館者氏名、住所、電話番号、園学校名、来退館時間、体温を記入してもらうよう変更しました。小学生は住所、電話番号を記入するのが難しいので学校名を記入してもらいました。変更したことで大通小学校の児童は自分の学校名「おおどおり」の字を学び、書き順を覚えることができ、中高生は自分の住所、保護者の電話番号を覚えることができとても良かったと思います。乳幼児は初来館かどうかの把握が出来なかったり、保護者が「毎回記入する事が面倒で何枚かまとめて貰って家で書いてきても良いですか？」と問い合わせを頂くようになり、登録済みもしくは初来館の〇つけ欄を設け、登録済みの来館者は住所、電話番号を省略できるように簡易的な改良に加え、体温の記入も家族全員分となると負担が多いため37.5度以下の場合「OK」と記し改良しました。また非接触型の体温計を用意し来館者全員の検温をし、37.5度以上の発熱があった場合と解熱から24時間経過していない場合、家族に風邪症状のある方は来館を控えて頂きました。また、地域に感染が流行している時期は新潟市作成の「施設を利用するみなさんへ」来館時チェックシートを利用し、確認しました。その後もチェックシートは随時利用できるように修し利用しています。

③館内の環境整備の変更

3密を回避するため各部屋常時3か所以上の窓、ドアを開け換気しました。机に隣り合わせや向かい合わせに座らないように、座る場所を示す貼紙やマットを置きました。各部屋に「遊んだものいれ」の籠を設置し、遊んだおもちゃは籠に入れてもらいました。籠に入れられたおもちゃは職員が随時回収し、消毒してから元の場所へ戻しました。乳幼児の部屋は遊戯室への移動時等に利用者が居なくなった時に一時閉鎖し、設置されている遊具全てを消毒し換気しま

した。遊戯室では交代の時間毎に遊具の消毒、換気時間を5分設けました。冷水器も共有を避けコップを持参するか紙コップを提供して水分補給をしてもらいました。子ども達には水筒を持ってくるように呼びかけました。

④遊びの限定から選択肢の拡大へ

3密の回避により遊びの制限をしていましたが、手洗い、消毒の徹底をしていることで、物からの感染が見られなかった事から遊具を増やしました。特にカードゲームを増やすと小学生、中高生には人気で一緒に遊ぶメンバーを集い楽しんでいました。

外広場も有効活用し、チョーク遊び、シャボン玉、鬼ごっこ以外にも自転車の練習や3オン3コート内にドッジボールのラインを引き、小学校4年生以上は外でもドッジボールが出来る様対応しました。部屋を移動の際には手洗いを徹底し、バドミントン・卓球は1対1、ドッジボールは10人までという人数を制限し対応しました。マスクをしたまま遊戯室で過ごしていましたが、暑さと運動が激しくなるとマスク着用も危険になるため、距離を保てる6名に制限したり、こまめに休憩を挟んだり対応しました。

また、園外保育の場としても利用があり、コロナ前の大きなイベント時に提供していた遊具等を園児に提供すると、普段とは違う児童館にわくわくして遊んでいました。休日に家族を連れて再度来館する園児も見受けられ「子どもに連れて行ってと頼まれました」という声も聞かれました。

⑤SDG s チャレンジ

昨年度同様に来館時の手洗い、部屋の移動毎の手洗いを徹底したことにより、毎回ハンカチを持ってくるように声掛けしました。「ハンカチを忘れたら取りに帰る」と職員と約束する事でハンカチ持参率が高く、中高生もハンカチを持って来るようになりました。出かける時のエチケットとして身につけてきたと思います。

乳幼児事業

(1) 総括

近年、乳幼児は産後休暇、育児休暇の取得後から保育園に入園する0歳から1歳の利用母が多く、児童館より支援センターの利用が多かったように思いますが、今年は3歳まで入園しない子どもが多く2歳児の利用が増えました。

2～3歳児は身体の発達も大きく、支援センターより身体を動かせる児童館を利用することが増え、冬季は毎日来館する親子が数組いました。

また、保育園帰りに児童館へ立ち寄り、夕食まで思いっきり身体を動かして過ごす親子も見受けられました。休日には、家族で過ごしたり、近所のグループで集まったり同世代の子どもの交流を目的に来館する親子も見受けられました。

いちごタイム（作って遊ぼう・農園の活動）

毎週火曜日の10時30分から概ね20分程度、乳幼児の定例イベントとして、『いちごタイム』を開催しました。『いちごタイム』は主に入園前の乳幼児親子対象としていますが、夏休みや春休み中は保育園児や幼稚園児の参加もありました。内容は主に手遊び、親子触れ合い遊び、絵本読み聞かせ、季節にちなんだ遊び、リトミック等を提供してきました。参加組数

は平均8～12組で、月齢は1・2歳児が多かったです。近隣の支援センターでも「火曜日は児童館の『いちごタイムの日』と伝えて下さっている事もあり、『いちごタイム』は定着しています。

また、第3火曜日には『誕生日会』を取り入れました。『誕生日会』では、大きなケーキパネルの装飾をし、誕生月のお友達を皆で一緒にお祝いしました。

その他、農園の活動ではじゃがいもやさつまいもの苗を植えたり、畑の水やりや収穫など土と親しむ機会を設け、収穫時にはお土産として持ち帰ってもらいました。

① いちごみるくタイム

ママのリフレッシュする場として『いちごみるくタイム』を今年度新たに設立しました。

『いちごみるくタイム』はママ同士が児童館ならではの【遊び】のカードゲームやバドミントン・卓球等を通してコミュニケーションを取りやすくし、その後のママ同士の繋がりを深めるために始めた事業です。0歳のねんね赤ちゃんから1歳のよちよち赤ちゃんを持つ母親を対象に企画しましたが、2歳児の母親も「参加したい」と言う声を聞き、その後どなたでも参加できるようにすると、毎回4～6名が集まり、2・3種類のゲームで盛り上がっています。ゲームは得意不得意が分かり、見た目と違う姿が見られ、母親達の打ち解ける速さが違うと感じています。また母親同士で認めあう姿が見られ、母親の自己肯定感の向上にも繋がっていると感じられます。中には「思春期の息子とこのゲームで打ち解けられるかな？」と母親が長子のために検討している姿が見られたり、保育園に通う兄弟を連れて休日に遊びに来る姿も見られました。それから平日の午前中の利用者が増え、毎日4～6組の利用が定着しています。

② パパサロン

子育てオーエンジャー☆みなみと共催で行った『パパサロン』は南区で初めてのパパ向けの連続企画です。近年パパの利用も多く、パパの育児参加が多く感じられていますが、イベントへの参加はママが多い事からパパの参加は控えめでした。コロナ禍で飲み会、付き合い等が減っている今、パパ同士も関わり繋がる事で育児ストレスを解消してほしいと始めた企画です。同学年を持つパパが関われるようにと、ベビーマッサージ、自己肯定感を育むお話、足育、ふれあい遊び、運動会、リトミックと回を重ねる事で繋がりが出きるように企画しました。どの回もパパのみの参加に限定する予定でしたが、今は夫婦で子育てを共有している家族が多く、「ママも参加したい」「ママと一緒に参加する」という声もあり、パパが1歩踏み出すことを目的にママの参加もOKにすると急激に参加希望者が増えました。そんな中でも、父親同士の語り場を提供すると、「ママが楽になるようにと手伝ってもやり直される」「文句を言われる」等パパはパパなりの育児ストレスを抱えていることを声に出せる場になっていました。

また、参加者の中でキッズ向けの資格を取ったパパが「自分も提供できないか？」と来年度のパパサロンの講師として名乗り出て下さり、来年度は地域のパパが提供するパパサロンが実現できそうです。

③ 季節イベント

定例の乳幼児イベントの他に季節に合ったイベントも実施しました。春はじゃがいもの苗植え体験、7月七夕会、10月ハロウィン、12月クリスマス会、2月豆まき会、3月ひなまつり会と、それぞれの季節を感じながら、月齢の低い乳幼児でも無理なく参加で

きるイベントを実施しました。定員制にすると予約はあつという間に埋まり、キャンセル待ちが多く出たため、今年度も2部制して同じ内容を2回実施しました。内容は例年人気の、職員が寸劇をして母親達にも見て楽しんでもらえる取り組みと「写真スポット」を設けました。各イベントで「写真スポット」や「お昼寝アート」などのブースを設けるととても人気で、1人から友達同士、母親と一緒になど様々な写真撮影を楽しんでいました。12月のクリスマス会では、大通郵便局局長にサンタクロースになってもらい、子ども達にプレゼントを手渡ししてもらいました。子どもと母親は大喜びでした。2月の豆まき会ではコロナの流行期だったこともあり、豆まき体験は実施せず、雰囲気を楽しんでもらいましたが、母親からは「豆まき体験をさせたかった」と残念がる声も聞かれました。今後も、その都度利用者の声を聞きながらイベントの内容を柔軟に変えていきたいと思えます。

(2) 来期の目標・課題

近年、支援センターからの紹介や、ロコミ、HP等での来館者が定着してきたと感じます。友達同士で来館したり、紹介してもらっての来館は初来館のハードルが低く、来館時の緊張感が少なく、すぐに職員と打ち明け、会話が弾みます。また、平日、休日関係なく利用者が平均的に来館し顔見知りになると自然と交流している姿が見られました。特に父親は来館しても交流まではなりにくかったですが、今年は父親同士の交流の場も見られました。課題としては、BP講座開催会場の一つになっていますが、BP講座開催後の交流の場に児童館の選択肢が無いように感じました。月齢的にも「行ったことあるけど大きな子が多く、我が子には早かった」等の声が聞かれ、まずは支援センターという考えから支援センターで集まっているという話を聞きました。しかし支援センターでは、BPのメンバーが集まると、場所を陣取っているイメージで他の方が遊びにくいという声を聞きました。その点、児童館は部屋も多くあり、時間も長く開いている事から利用に適していると感じます。来年度いちごみるくタイムを午後に「赤ちゃん集まれ」と称し「赤ちゃんの時間」を設けBP開催後の利用促進に努めたいと思えます。コロナ禍で保育園、学校行事が人数制限・時間分散等により、クラスの保護者との交流する場がなかったり、出席する機会がなく、子どもの通う保育園、学校に興味、関心の意識が下がったと感じます。その為悩み等を一人・夫婦で抱え込んだり、孤立する環境が出来てしまうと思えます。来館した際に利用者に関わる事で利用者が打ち明けられる雰囲気を作り、利用者の悩みや不安に寄り添いながら、乳幼児と保護者の居場所になるように、行って良かったと思える児童館にしていきたいと思えます。

2. 小学生事業

(1) 総括

今年度は1年生のほとんどが学童クラブに在籍し、2年生も春から学童クラブに行く、習い事を始めた等で春先は来館が伸び悩みました。夏ごろから学童クラブだけでなく、お友達と遊びたいという理由から学童をスポット利用にし、児童館を利用する1年生が増えました。児童館では、コロナ前は友達と約束をして利用する子どもが多く、グループで遊ぶ姿が多く見られましたが、今年度は少数で来館し、その時居る子ども達で遊ぶ姿が見られ、他学年交流が自然とできました。高学年は低学年への配慮が上手で、低学年は高学年のパワフルな姿に相乗し、楽しく過ごしていました。また夏ごろから中学生との交流も増え、顔見知りの中

学生が来ると引っ張りだこでした。冬頃には乳幼児との交流もし始め、乳幼児の遊び相手になり優しく関わっていました。児童館を利用すると、また来館したくなる児童が多く「また明日も来たい」という声が聞かれ、「毎日おいで」と声を掛けると子どもたちは喜んで遊びに来ていました。常連の子どもたちが増えると、学年が違って名前を覚え、友達になっていく姿が見られ、知っている子どもが来館すると歓声が上がり玄関で出迎えている姿が印象的でした。ある程度人数が揃うとドッジボール、一輪車、鬼ごっことその時居るメンバーで遊戯室をどのように利用するか話し合い、決めている姿が見られ、やりたいことが出きるようにみんなで考えている姿も印象的でした。ある日、4年生女子数名から友達同士のトラブルを聞くようになりました。「〇〇ちゃんとは遊びたくない」「別で遊戯室予約して」と職員に話してきました。職員も話を聞き事情に合わせて調整しましたが、長引くばかりだった為、4年生女子を集め「子ども会議」を行いました。不満や困りごとが出る中、お互いを責めるだけでなく、気配りするメンバーもあり、叱咤激励も起こりました。互いを認め、言い合える仲であり、すぐに打ち解けることの出来る柔軟性に驚かされました。その後も仲良く過ごしています。このように子どもたちが自分たちで解決する様子も見られています。

① わくわくタイム

月に1回、小学生を対象に遊戯室で体を動かす遊びやレクリエーション、工作等を行いました。昨年同様に密を避けるため遊びの内容に合わせて定員を設け、遊びました。夏には地域の防災士を呼び、防災に因んだレクリエーションや新潟大学のサークル CAN s の皆さんと遊びました。子どもたちは一度遊ぶとその遊びがお気に入りになり、遊んだことの無い子どもたちも誘って遊んでいました。

② 出張おりがみ Days

昨年に続き大鷲小学校の生徒に向けて月に2回、定員各10名で7か月間実施しました。大鷲小学校の低学年は大郷地域生活センターで運営している学童クラブに所属している児童が多く、学校帰りにそのまま参加でき、学童クラブに所属していない児童も自分で来所したり、送迎してもらい参加していました。はらぺこあおむし、カーネーション、くすだま、マリオ・カービーswitch等、様々な折り紙を提供しましたがどれも人気で予約が埋まっていました。また、児童館でもイベント毎に季節に因んだ折り紙を提供し、職員それぞれが常時折り紙を提供できるようになり、一人で遊べない・遊びが5分持たない子どもも他の子ども達や職員と一緒に集中して取り組んでいました。参加した子ども達は職員の折り方を真剣に聴く子ども、先走り折り方を間違える子ども等様々でしたが、完成すると自信満々に迎えに来た保護者に完成した折り紙を見せていました。毎回参加する子どもからは手先の上達、一人で集中して遊ぶ、順番を守る等の変化が見られました。

『おりがみ Days』は来年度も引き続き大郷地域生活センターから移動児童館の依頼を受けました。

③ 移動児童館

大郷地域生活センターの移動児童館に続き、夏休み前に学校・学童・保育園にPRしたところ根岸ひまわりクラブが2回・大鷲学童クラブが2回・大鷲小学校 PTA 行事の計5回の依頼があり、カプラ遊びや集団ゲームを提供しました。カプラ遊びはここ2年半移動児童館用として準備しており、「カプラはいつでもできます。」と声かけをしておりましたが、依頼は全く提供出来なかった為とても新鮮だったようで、夢中になって遊ぶ子どもや保護者の姿が印

象的でした。

今年度新たな試みとして8月と10月に「黄金ふれあいセンター」でカプラの移動児童館を実施しました。黄金地域から児童館へ来るのは距離があるため、少しでも児童館を知ってほしいという願いから始めた企画ですが回覧板での周知の反応は、いまひとつでした。当日参加している子どもが、ふれあい公園で遊んでいる子どもたちに「カプラ楽しいよ～」と声を掛けてくれ10名程の子どもがカプラ遊びを楽しみました。

④農園クラブ

コロナ禍において白根北児童館の活動の見直しを行いました。設立当初の「子どもたちに土に触れて欲しい」という願いから設立された農園を児童館運営の中心に位置づけ、子どもから子育て世代、多世代間の交流を促し地域の繋がりを深めること、白根北部の各地域の農業体験の格差を埋め郷土愛をはぐくむことを目標に、白根北児童館の農園活動を地域と子どもが関わる拠点活動として農園活動を主とした「小学生クラブ」を立ち上げました。月に1回計6か月間、農園で苗植えから収穫、収穫した野菜の提供を一貫して行います。今年は根岸小学校・大鷲小学校・大通小学校の3地域の小学校から11名の参加者が集まりました。農園活動には、地域のボランティアグループ「きたもんクラブ」に協力を頂き子どもたちと一緒に活動してもらいました。また農園活動を発展させるために、根岸地域前コミュニティー協議会会長の紹介で、鷲巻地域の農家から約100坪の畑を貸して頂けることになりました。農地拡大により手作業ではかなりの労力が必要になります。そこで、ワーカーズコープの機能である、仕事おこしサポート体制「社会連帯」を活用し、耕耘機の購入や農作業道具の補充をしました。

小学生クラブを「きたっこわくわくクラブ」と名付け、じゃがいも・さつまいも・ミニトマト・バジル・ししとう・ピーマン・ゴーヤ・枝豆の他に、地域の方から枝豆・オクラ・スイカ等苗を頂き苗植え・草取り・収穫を中心に活動を行いました。野菜を地域の方へ提供する「あおぞら市場」を夏と秋に開催。その際に小学生クラブのメンバーは受付や売り子役、来年度の苗代の募金をきたもんクラブの方々で行いました。夏は先着30名が3品選べるよう、90袋、10種類の野菜が並びました。また、白根北中学校の総合学習「北の塔」の野菜販売ともコラボが実現しました。

秋はさつまいも23袋を用意しました。その際畑を貸して下さった方やきたもんクラブの方への感謝のセレモニーや白根北中学校のよさこい披露、ハロウィンパーティを同時開催しました。

参加したクラブのメンバーからは、「楽しかった。」「来年もやりたい」という声も聞かれ、きたもんクラブの皆さんからも、3地域それぞれに子どもたちがいる喜び、ボランティアメンバーが集う喜びの声を聞かせて頂きました。

クラブに参加しなかった子どもたちも農園活動に興味を持ち、「何かやりたい」という声から、「お手伝いスタンプカード」を作成しました。水やりでスタンプ1個、バケツ一杯の草取りでスタンプ2個10個貯まると野菜引換券になる仕組みです。お手伝いが見える化したことにより、子どもたちも「大変・めんどくさい」から楽しいに変わりました。そしてお手伝いしたことで感謝されることにより喜びを感じることができました。

また子どもたちが、持ち帰った野菜を保護者が料理して沢山の美味しかったという話を聞きました。頂いたレシピをおたよりや、館内に掲示すると来館者からも好評で、現在も掲示中です。

これらの活動を通して野菜の生育を見守る楽しさ、収穫する喜び、野菜を提供し感謝され

る喜びを体験し、地域の特産である果物や野菜に興味を持ってもらい食育と郷土愛に繋げていきたいと思います。

(2) 来期の課題・目標

コロナ禍の3年は休館や遊びの制限があり、来館しにくさも出てきたのではないかと感じます。子ども達にとって利用しやすい児童館になるには、改めて定着するように働きかけが必要かと感じます。一方一度来館した子ども達は何度も遊びに来ています。職員との関わりや児童館で遊ぶことが楽しいと感じてくれていると思います。子ども達にとって人との関わりがとても大切な時期であるため、今後も職員の関わりや他学年や学校の異なる子ども同士・乳幼児や中高生・地域の方の交流も大切に繋げて行きたいと思います。

3. 中学生・高校生事業

(1) 総括

中高生の利用時期は暖かい時期が多く、部活動の休みの日や週末にグループ毎で来館していました。春休みには新1年生が多く来館し、遊戯室でバドミントンを楽しんでいました。入学してから、バドミントン部に所属した生徒もあり、児童館で体験したことが活かされたのではないかと思います。昨年に引き続き3年生野球部員は定期的に来館し、遊戯室でバドミントン、バレーボール、卓球等で身体を動かし、待ち時間に勉強をしていました。毎年恒例で農園の手伝いをお願いすると、必ず手伝ってくれてとても頼もしい限りです。その姿を見ていた小学6年生が、新中学1年生になり、今年は小学生クラブが苗植えを行う前の畝づくりを手伝ってくれました。その後も農園作業をしている職員を見つけると、「何しているの？手伝うよ」と駆けつけてくれました。また乳幼児のイベントの手伝いを頼んでも、時間に合わせて来館し職員のお手伝いをしてくれました。

秋ごろから中学3年生は受験勉強が本格化し「遊びに来れないよ」と職員に話していたにもかかわらず、秋の「あおぞら市場」で「よさこいを披露してほしい」とお願すると11名が参加し、「あおぞら市場」のオープニングを務めてくれました。その後もハロウィンパーティーのお手伝いをお願いすると、そのまま各自ブースに行き乳幼児と交流し、最後には参加者全員とじゃんけん大会で中学生が乳幼児相手に手加減をしたり、保護者相手に本気になったりと楽しく交流していました。

また日常でも小学生が「一緒にドッジボールをして下さい」とお願いすると快諾し、小中学生の交流が見られました。それでも中学生から小学生へ声を掛けるのは抵抗がある生徒もあり、職員に助けを求めることがあります。ある日、中学生男子3名が、来館者が小学生以上の10名程度だったことから「皆で遊びたいな」と職員に話してきました。「誘ってごらん」と職員が話すと、何度もタイミングを見、ためらいながらも小学生に「一緒に遊ばない」と声を掛けました。うなずく小学生達の目の輝きが変わり、他に来館していた中学2年生女子1名(江南区)、小学生1～4年生4名と職員全員でドッジボール・カードゲーム等で遊びました。とても楽しいひと時で声を掛けられた小学生はもちろんのこと、一緒に遊べた中学2年生女子と声を掛けた中学1年生男子(不登校中)も達成感と充実感が得られたと感じました。

江南区から来館する中学2年生女子は他の中学生とも学校が違う為交流がなかったですが、このように学年男女問わず遊ぶ事が定着したことから今では白根北中学校の女子生徒とも仲良くなり「児童館楽しい！週末の児童館を楽しみに一週間過ごしている。」「高校生になったらバドミントン部入りしたい」等校区が違っても遊べる児童館を居場所にしてあげています。

中学生の「子ども会議」も実現しました。お題は中学生から出た「遊戯室の小学生の時間配分が短い」「集会室のピアノの音量問題」「使ったおもちゃを消毒入れに入れない利用者問題」の3つで、「遊戯室の小学生の時間が15分は短い」という中学生の考えに、職員が「体力の格差とコロナ禍のマスクの危険性、他学年交流の魅力」を伝えると納得し「みんなで遊べる時は都度休憩しながら20分に伸ばしてあげても良いよね」と決まりました。「ピアノの音量問題」は集会室の配置換えを検討し「使ったおもちゃを消毒入れに入れない利用者問題」は「使った物はここに入れてね!」の掲示が小さい。もっと目立つように」とアイデアをもらい実践しました。中学生になると発言、企画もとてもレベルが高く、中学生のことだけでなく小学生のことも真剣に考え、職員も一緒に考える場になりました。

また3月には中学3年生が「進路決まりました〜」と進路決定の報告に来館してくれました。「卒業式泣いた」「高校では〜したい」等職員に話してくれました。これからも「職員に話したい」と来館できる場になればと思います。

イベントでは、普段忙しくて来館自体が難しい中高生の現状を考慮して、日にちを指定するのではなく月間や週間で行いました。期間が長い分、平日から休日までより多くの中高生がイベントに参加することができました。

今後も、中高生にとって居心地のよい『居場所』となるようにイベントや普段の関わりを大切にしていきたいと思えます。

(2) 来期の課題・目標

中学生・高校生の『居場所』作り

昨年掲げた以下の目標に今年度は成果が見られたと思えます。今年度引き続き継続していきたいと思えます。

中高生の年代になると、学校の授業や部活動、習い事等でそもそも児童館に足を運ぶこと自体が難しくなります。忙しさに加えて人間関係や進路のことなど悩みが多くなる時期に、児童館が息抜きするための1つの『居場所』になればと考えています。中学生はどの学年も小学生の時から来館していた子ども達で、一時来館しなくなっていた子ども達が再度来館し、成長した姿を職員に気付いてもらい、職員と沢山話をして交流している姿を見ると、彼らにとって安心できる職員がいる自分の『居場所』の一つとして感じ取ってもらえているのだと思えます。また中学生になるとまだ児童館の存在を知らない、知っているけど行ったことない子ども達と一緒に来館し新たな利用者も増えています。

中高生の来館は、小学生時代の関わり、更には乳幼児時代の関わりが反映されると感じました。来館した時には職員が密に関わり、信頼関係を築くと同時に中学校等にポスターを掲示して周知していきたいです。イベントの内容もスポーツ系に加え、職員とのおしゃべりタイムや受験時期の学習応援タイム等を設けてゆっくり話したり、勉強の息抜きをしたりするものを提供できればと思えます。日々の忙しさなどからストレスフルな環境で過ごしている中高生の心の拠り所となるように『居場所』作りをしていきたいと考えております。